

聖書：使徒 8：26～40

説教題：一人の救いのために

日時：2013年10月13日

サマリヤ伝道の立役者として用いられたピリポに、さらに新しい導きが与えられます。主の使いが彼に現れて、「立って南へ行き、エルサレムからガザに下る道に出なさい。」と言います。そこに「このガザは今、荒れ果てている。」と注釈がついています。これは何のための注でしょうか。当時ガザと言った場合、人々は二つの場所を思い浮かべたようです。すなわち以前、敵によって破壊された古いガザと、その後で海辺に近い方に建てられた新しいガザです。この内、荒れ果てて廃墟と化しているガザのほうに行け、という命令だったこととなります。しかし欄外には別訳として「これは、荒れ果てた道である。」という訳も示されています。エルサレムからガザに行くにはいくつかのルートがあったようですが、こちらの場合、荒れ果てた道の方を行けという指令だったこととなります。いずれにせよ、これはピリポに与えられた主の命令がとても不思議なものであったことを強調しています。ピリポはサマリヤで大活躍した人です。町全体に大リバイバルを起こし、多くの回心者を起こした人です。そんな彼がさらに大きな町へ遣わされるのなら話は分かりますが、なぜそんな人気のない荒れ果てた場所へ主は遣わされたのでしょうか。

その言葉に従ったピリポの前に現れたのは一人のエチオピア人でした。この人はエチオピア人の女王カンダケの高官で、女王の財産全部を管理していた宦官でした。荒れ果てた町、あるいは荒れ果てた道に誰がいるのかと思って出かけてみると、そこにいたのはこのアフリカ人でした。これはここを読む私たちも、またピリポ自身も、全く想像もしなかった人だったでしょう。このエチオピア人の宦官は、礼拝のためにエルサレムに上り、いま帰る途中でした。彼が異邦人であることは明白ですが、彼はユダヤ教に帰依した改宗者だったのでしょうか。彼は宦官として、文字通り、女王に仕える身として去勢された人だったなら、改宗者となることはできませんでした。申命記 23 章 1 節：「こうがんのつぶれた者、陰莖を切り取られた者は、主の集会に加わってはならない。」あるいは宦官という肩書きが、女王に仕える役員という意味で、去勢はしていなかったとすれば、改宗者となることはできたでしょう。いずれであれ、これまで使徒の働きの中で取り上げられて来た人々と比べると異色の人です。人種的にも、位の高さから言っても違います。そんな彼に今日の箇所での救いが与えられて行くのです。

ここに重要なメッセージが二つ示されています。その一つ目は、イエス・キリストの福音はサマリヤにまでもたらされたことが直前に記されましたが、そこにとどまらないということです。神はさらに広い範囲の人々を救いに招いておられる。具体的に異邦人宣教の御心が確信されるのは、もう少し後の使徒の働き 10 章においてですが、それに先立って福音の祝福はサマリヤばかりか、より遠くの人々にももたらされるものであること、全世界の人に差し向けられ、提供されるものであることが示されていると言えます。

そしてもう一つのメッセージは、神は一人を追い求められるということです。私たちは直前に記されたサマリヤにおける大リバイバルに目を奪われがちですが、神はここで一人の救いのためにピリポを遣わされます。人間的に見るなら、あまりにも非効率的な配置転換です。もったいないことのように見えます。しかし神の前ではそうでないのです。神は一人の人を大切に

して、ピリポをわざわざ荒れ果てたガザへと送られるお方なのです。

さて、ピリポは主の命令に従って出て行きます。そしてエチオピア人を認めると、御霊が「近寄って、あの馬車といっしょに行きなさい」と言われたので、それに従って行動します。すると不思議な導きを彼は経験します。キリストの福音とは何の関係もないと思われたアフリカ人の高官が、何と預言者イザヤの書を音読していた！これは神がこのように彼を導き、準備して下さったことに他なりません。音読はしばしば黙読より効果的と言われます。ただ字を目で追うだけより、自らその文字を発音しながら読む方が、より頭に入って来るといことがあります。また印刷された今日の本とは違って、当時の書物はこうでもしないと読みにくい、特に馬車の中では、ということもあったのかもしれませんが。ピリポはこのことを知るとすかさず、「あなたは、読んでいることが、わかりますか」と尋ねます。するとエチオピア人の宦官は「導く人がなければ、どうしてわかりましょう」と言って、ピリポを馬車の中に招きます。こうしてピリポは宦官の隣にすわって、教え導くこととなったのです。

さて宦官がこの時、音読していたのはイザヤ書 53 章でした。32～33 節：「彼が読んでいた聖書の箇所には、こう書いてあった。『ほふり場に連れて行かれる羊のように、また、黙々として毛を刈る者の前に立つ小羊のように、彼は口を開かなかった。彼は、卑しめられ、そのさばきも取り上げられた。彼の時代のことを、だれが話すことができようか。彼のいのちは地上から取り去られたのである。』」彼はこの箇所をもとにして、ピリポに尋ねます。「預言者はだれについて、こう言っているのですか。どうか教えてください。自分についてですか。それとも、だれかのほかの人についてですか。」この質問は彼が真剣に聖書を読んで来たことの現れです。漫然とではなく、一つ一つ意味を問いながら、彼は読み進んで来ました。そしてこれは誰のことを言っているのか、分からない状態にありました。彼は宦官であるため、また異邦人であるため、エルサレムに上っても神殿の内側に近づくことはできなかったことでしょう。一番外側の異邦人の庭までしか入れなかったでしょう。そして願っていた宗教体験はできず、ある種のフラストレーションを覚えながらの帰途であったかもしれません。しかし彼はイザヤ書を買って一生懸命に読み、自ら問いを発しながら格闘していました。その聖書に集中する彼の真剣な求道はここで豊かに報われることになるのです。

それにしても彼が発した問いは最高の質問でした。ピリポが馬車に乗った時にこの質問をするように、このタイミングも神によって用意されていたのでしょうか。ピリポはこの問いを受けて、35 節に「ピリポは口を開き、この聖句から始めて、イエスのことを彼に宣べ伝えた。」とあります。ここに重要な真理があります。それは旧約聖書はイエス・キリストを指し示しているということです。「この聖句から始めて」とありますが、ピリポはイザヤ書 53 章だけでなく、他の箇所も引用したことでしょう。そしてそこからイエス・キリストのことを語ったのです。つまり聖書の主題はイエス・キリストであるということです。この箇所と似ている場面として思い起こされるのはどんな出来事でしょうか。それはエマオ途上でイエス様が二人の弟子と歩かれたあの場面ではないでしょうか。あの時もイエス様は「モーセおよびすべての預言者から始めて、聖書全体の中で、ご自分について書いてある事がらを彼らに説き明かされた」とありました。またイエス様は復活後に弟子たちに会った時も、「わたしについてモーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就するということでした。」と言われました。イエス様ご自身、このように聖書の主題はご自身であると述べられました。これは聖書の性格

を考えてみても言えることです。聖書は神からの私たちへのラブレターであり、私たちの救いのために神が与えて下さった書物です。ですからその内容はキリストによる贖い以外のことは書かれていないのです。約束のメシヤによる救いに焦点が当てて書かれています。ですからどこを取っても、聖書はすべてイエス・キリストを指し示していると言えるのです。私たちはそのように聖書を読まなければなりませんし、ピリポのようにどの箇所からでも、イエスのことを宣べ伝えることができる者とならなければならないのです。

この個人伝道の結果はどうだったでしょうか。それは喜ばしい宦官の信仰告白となって現れます。宦官は36節でピリポに問います。「ご覧なさい。水があります。私がバプテスマを受けるのに、何かさしつかえがあるでしょうか。」彼は信仰告白した者はバプテスマを受けるべきであると知っていたのか、あるいはピリポが福音を説明する中で、ペテロがペンテコステの日に説教したように、洗礼を受けるように勧めたのか定かではありませんが、宦官はこれを願ひ出ます。キリスト教は心に信じたことを公に口に現わすように、そして内に信じていることを外に洗礼という形で表わすようにと述べています。宦官はここで「何かさしつかえがあるでしょうか」と問いました。彼は去勢した宦官として、あるいは異邦人として、神に近づきたくても様々な妨げ、隔ての壁がありました。しかしイザヤ書の56章などには、主により頼む外国人も、宦官も、主の息子・娘たちにまざる分け前と名を与えられるという約束が記されています。エチオピア人の宦官は、イエス・キリストにあつてこんな自分にも救いが開かれていることを知り、この方にあつて妨げは何もないと確信して洗礼を志願し、受洗の恵みにあずかったのです。

彼は水のある所から上がって来た後、ピリポを見なかつたとあります。主の霊が彼を取り去られたからです。しかし宦官の心から喜びが消えることはありませんでした。それはイエス・キリストを信じ、洗礼を受け、永遠のいのちを持つ恵みに生きる者となったからです。ピリポはそのあとアゾトすなわちアシュドデに現れ、福音を語りながらカイザリヤに行ったとあります。彼は宦官を救いに導いた後、女王の財産全部を管理している高官のそばにとどまって、人間的な報いを得ようとはしませんでした。主に命じられた働きを終えると、さっと次の地に移動して、また主に与えられた務めに励んだのです。颯爽としたピリポの姿がここにあります。

こうして福音はサマリヤばかりか、さらに遠い地域の人にもまで宣べ広められるべきものであることが示されました。神は全世界の人々を求めておられます。また神は一人を大切にし、求めてくださいます。これは私たちの救いについても言えることではないでしょうか。私たちはどのようにして主の救いにあずかつたのでしょうか。私が求めからでしょうか。確かにそういう面もあります。エチオピア人もそうでした。礼拝のためにエルサレムに上り、聖書を手に入れ、一生懸命にそれを読み、神を求めたことが今日の箇所に記されていました。しかし彼が神を求めた以上に、神がこの一人のエチオピア人を求めてくださったということこそ、今日の箇所が声を大にして語っていることではないでしょうか。私たちの場合もそうでしょう。神がこのお心を持って私に働きかけてくださったので、私は救いを頂いたので。私が神を捜し求めたのではなく、神が私を捜し求めてくださったのです。その神のみわざを覚えて、今朝、御名を賛美したいと思います。またこれは今、神を求めておられる方々にも当てはまることでしょう。単にあなたが神を求めて礼拝しているだけではない。神があなたを求めてくださっているのです。今、礼拝の場にあり、聖書に聴き、神のみそば近くにあるのではないのでしょうか。その神のお

姿を仰いで、この神へのふさわしい応答を一層導かれて行っていただきたいと思います。

そして今日の箇所が述べているもう一つのこと、この神の働きのためにピリポが用いられたことです。神が一人一人を求めて働いておられますが、そのみわざのために私たちを道具として用いるのです。私たちの救いを振り返ってもそうでしょう。神が私の救いを求めてくださいましたが、その神と共に、ピリポのようにそばで仕えてくれた人がいるのではないのでしょうか。私の救いを心にかけて、陰でとりなし、そばにすわって一緒に聖書を開き、心を込めてキリストについて話してくれた人がいるのではないのでしょうか。そのことを知り、感謝する私たちは、私たちもまた、この神の働きのための道具とさせられたいと思います。神ご自身が失われている人々を求めておられます。神ご自身が一人を大切に、その救いのために働いておられます。その神を仰いで、私たちも良き道具として、ご計画のために用いていただくことができますように。神が愛しておられる方の隣で、みことばを通してイエス・キリストを伝えることができますように。そうして神が求めておられる一人一人が救われる喜びに仕える特権と光栄に歩みたいと思います。